彷徨

第七号

都立西校山岳部

巻頭言

三好富士雄

「山を本当に愛する者に、悪い人間は居ない」

之は小生の山に対する小さい時からの信念である。

少年は少年なりに、高校生の時は高校生なりに、大人は大人なりに、山に対しては言い知れぬ、あこがれと夢と、希望を抱くのである。よく山を或は自然を征服すると云う人があるが、小生はこの言葉は大嫌いである。

自然は征服されるものではない。征服したという気持になっているのは御本人だけである。山はそんなに簡単に征服されるものではないし、理解されるものではない。山はあくまで神秘的であり、偉大である。従って山に対しては我々は一体となって自然の中に入ってゆくことが大事なことだと思う。殊に都会に生きる我々は自然に接し山を愛するの精神を涵養して、生活を豊かにしたいものである。

部報によせて

「山を敬す」

都筑修一

高い山に登り雄大な大自然の中に身をおく時、何時も一種の霊感に打たれると共に、自分が如何に小さな存在であるかを痛感するのである。

人間社会は実に複雑であり且微妙に動いている。そして人は人格の尊重とか自己の批判とか内向的に自分と云うものを内省しがちであるが、自分の極度の発展と云うことは時に人間社会を離れて大地の懐に抱かれ、無限の大空を仰ぐことによって始めて可能であるのであろうか。

こんな意味で私は山を愛する。愛すると云うよりは山を敬する。天地人、即ち人は天地の大自然の真唯中に身を托して真に自分の位置を見極めることが何より有意義であろう。

山に登らないの弁解

田口一男

ムスタフ・アタ。ウェルヘルミナトップの氷を冠った高峯寺を集めたが戦災で失ったが「飛鶴舞うアコンガクア」等の見出しつきの新聞写真をみると又例の癖、血液きを始めます。山の名に値するものに未だ登った事もないが、昔スキーで山越えをした際吹雪のはげしくゆく安達太良の中腹に銀色に輝いた樹氷や尾瀬湿原からみた燧岳や水芭蕉の美しさを思い起します。今度北陸路を旅して眺めた剣岳や白山の雄大な山容に対すると山に登ってみたいと山の美しさの場にあるが生来の怠け癖も手伝って現在は専ら写真と切抜きに満足している。時に富士の美しさに対すると何か圧倒されるようで征服！そんなことも考えるが、日本の象徴の一の秀峯山を愛するが故に登らないでおきたいと考えるのです。

目次

巻頭言

部報によせて

山を敬す

山に登らないの弁解

第35回例会　田苅山集中登山……1

第36回例会　奈倉尾根……3

第37回例会　水無川本谷……3

第38回例会　〃　〃……3

第39回例会　奥秩父……4

第40回例会　八ヶ岳……13

第41回例会　蓼ヶ岳……14

個人山行……16

冬期山行計画……2

富士登山……11

NAC会報……17

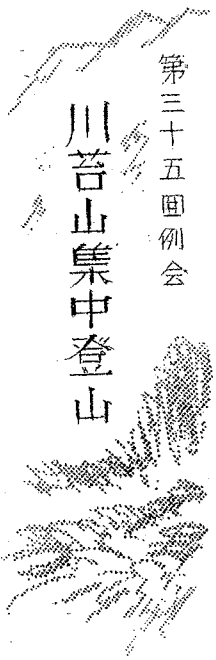
山麓情報……18

筆者紹介……18

おわりに……19

第三十五回例会

川苔山集中登山



【目的】一年生の歓迎と部内親睦を目的に行われた。

① 川苔八合林道

○一九五一、四、二二

○メンバー　3A中野(L)　1D関谷、富田(OB)

○コースタイム　立川(七三〇)—氷川(八三七)—六川山荘(九〇〇)—川苔谷出合(九四五—五〇)—犬ツリ岩(一〇二〇 食事五五)—百ヒロの滝(一二四五 食一三〇)—横ケ谷(一〇〇)—頂上(一四五)

新一年の部員が予定ではこのコースに一番多く行くはずが当日参加は関谷一名、参加を申込んでおきながら当日この様に多くの不参加はどうしてであろうか。道は種々分れているが、我々の通った横谷ぞひの道で一番早く頂上につける様だ。百尋の滝に意外に早くついたのでその間の食事とこゝで45分の字真さつえいの休けいをとったがえは確かに長過ぎる。しかしこの二回の休以外は立ち止まらずハイキング的な道を思のはず玄事もなく頂上に着くのもあっけない。林道コースの頂上予定時間より早く一時間四十五分頂上着。(中野)

② 真名井沢

○パーティ　L森沢、岩垣、林　OB神島

○コースタイム　川苔駅(七一〇)—真名井出合(七四五—七五〇)—才四ノ沢(九〇〇—九〇五)—奥止の滝(九三〇)—F28(九五〇)—F32(一〇、五〇)—二の沢(一一〇五)—二股(一一四五)—赤城屋根(一二一〇)—山頂(一三四五)

指導標に導びかれて真名井沢に着く。始めは変化のない河原歩きであきてしまう。出合から一時間余才四の滝を右手に見るとその先は滝々、々、F13の滝は約七米で水量も多く奥止めの滝と共に本流の雄物である。二三の滝を越して行くと水は跳ねるくらい場のアソンュに一ぱいたアルバイトの後明瞭な赤城屋根の道へ出る。三十分程で川苔の山頂に立つた。(林)

③ 曲げ谷沢

○パーティ　鈴木、佐藤、平沢(一郎)

○コースタイム　立川(一一〇)—川井(一〇三五)—六丁橋(一〇三五—一)—百軒茶屋(一〇四〇)—ゴンゲリ沢(一〇三五)—曲げ谷沢(一一五五)—川東東ノ肩(一〇一〇)—山頂

古里駅で他のパーティと分かれて曲り谷沢の出合迄歩ぶす、始め陰気な感じの沢なれ、F2をこすと急に視野が開ひけ明るい沢となる。二三の滝をこすと曲り谷大滝へ出る。急なまき道をとり屋根とこす。一三の小さな沢の出合をすぎると水は殆んどない炭焼小屋を通過し暗い沢をたどり尾根にとりつく。平坦な道を行くとやがて頂上が見えすでについたパーティの声が聞えた。(平沢一郎)

④ 入川八合

○パーティ　L田中(実)　山田、福田

○コースタイム　立川(六三〇)—青梅(七二三)—古里(七五〇)—古里附(八〇五)—養蜂場(八一〇—一三)—大蔵出合(八三五)—奥止滝(八四五—九〇五)ウラジにかえる小休(一〇、五—一一〇〇)—非子の滝(一一三〇)—早滝橋(一一四五)—同発(一二一五)—径に出る(一〇〇—一一五)—広い所(一三〇—一四〇)—向井戸(一三〇五—一二〇)—川苔山(三四〇)

貪欲な沢の出合に沿って行く。大蔵沢の出合を過ぎると両岸はせばまり岩壁に圧迫される様になる。小奥止、奥止の滝をすぎると広い河原歩きで一向面白くない。格二の滝もいつしか過ぎて最後に上中下三段の速滝を仰ぐ。奥多摩屈指といわれるこの滝は三十米程もあり人を近ずけない。こゝを引返し、すぐ横の沢をつめる。(福田)

⑥ 刀口

○パーティ　L笹田、長崎、加藤

○コースタイム　氷川(八九二五)—大沢(九、五〇)—倉沢(一〇三〇)—日原(一一〇〇)—日原ヒュッテ着(一一一五)—同発(一一〇〇)—小川の又滝(一一三〇)—カロ—出合着(一一三〇)—同発(一一〇〇)—忠三ノ滝(一一〇〇)—大滝着(一一〇〇)—同発(一一五五)—仙元峠着

ている。時に富士の美しさに対すると何か圧倒されるようで征服！そんなことも考えるが、日本の誇りのこの芳華山を愛するが故に登ゆまいでおきたいと思えるのです。

（二、三〇）—同発（三、〇五）—ソバツグ山（三二〇）—川苔山頂（四、三五）

感じのよい日原のヒッテで一夜を過した我々は足どりも軽く小屋をとび出した。小川谷と分かれて愈々迫行だ。すこし行くと両岸は狭ばまり、ゴルジュ状になる。沢は左に右に屈曲し暗い感じの沢である。やがて大きく曲ると最大の難所に出る。眼鏡に右岸をへずる。ドッとまぐると左岸に煙突が白糸をかけている。以然としてへらぬ沢身を行くと明るい感じの中心三の滝を望上げる。右岸のガレからブッシュをくぐり落口に出る。傾斜の増した沢をなおもさかのぼると30mの大滝に出る。昼食をとり一休みの後三つどっけを目ざして登る。登取への路へ出ると仙元峠を越えて川苔が拡いている。皆んなの叫び声に感じて山頂迄一走り。（加藤）

⑦

○パーティ　L村田、野口、戸田

○コースタイム　古里駅（八、〇〇）—布滝沢の頭（一〇、三〇）—山頂（一二、〇〇）

古里から杉の長く伐った山腹を行く。小春日和の好天気は小気味良く快適な尾根歩きとなる。小さな突起を越えて知らずくの後に川苔山へ、トップに着く。（中野）

帰　路

総勢二十数名で山道を駆け下る。たちまちのうちに鳩の巣に帰りついた。

総　評

村田博之

一、参加を約した以上は努めて参加してもらいたかった。この孫な事が実際に不測の事態を生んだ例が多い。

二、これは自分の失策だが頂上でもう少し部員親睦のための催しをしたら良かったと思っている。

三、一見まとまって行ってこの山行にも何か暗い雰囲気があったことは見逃せ得ないだろう。これは部員相互間の理解により解決される。

四、事故発生の際の処置は今後十分研究される余地があると思う。

五、参加されたOBには極めて失礼な云分だがOB全体としての山岳部に対する協力は期待外れで実に残念だった。

以上、五項目がこの集中に対する私の感想です。

最後に何から何まで不徹底だったこの山行計画に対し、部員並にOB諸賢のよせられた御協力を深く感謝致します。

冬期山行計画

現在の山岳部に為らしめた最後の十中生を送り出すに当り、過去の山行の総まとめとして大菩薩から三頭を経て御岳迄の多峯深雪南股の積雪期登山を行うことになった。

打　合　せ　会

11月29日（木）OBを加えて打合会を行う予定

偵　察

石丸峠と鷄峠間、本校水踏路偵察と小菅村から燒倉をオオマデ山に上げる目的をかねて12日踏査終了後行う計画。

【期日】　三月十六日—二十日

【コース】　塩山—番屋—大菩薩嶺（CI）—石丸峠—手の平—オオマデ山（CII）—奈良倉山—鷄峠—三頭—雁山（III）—大岳—日の出山（IV）—苔蒸—日向和田

【係】　食糧　佐藤（充）　林　　渉外　中野、加藤

装備　福田　下出、関谷　　会計　岩盛、斉藤

スキー合宿のお知らせ

一月の休暇を利用してスキーの合宿を水上の東大寮を利用して開くよう東大山岳部の竹内氏の積極的な助言と協力を得ましたので幹部打合せにより施行予定。詳細打合中です。道具、費用共部員には便宜便宜を計り、等々適当な方法を講じ東大山岳部員により行動から指導致します。出来る丈多数参加を希望します。

第三十六回例会

茅倉尾根

期日　五月十三日
パーティ　L林、下出、午田、斉藤、川村
コースタイム　御岳駅(八三五)—御岳神社(一〇二〇)—大岳小屋(一二〇五)—ツゾラ岩(一二〇)—両頭刈山(二四五)—十里木(四二〇)—五日市(五二〇)

御岳駅を出発し直ぐ多摩川の河原に降りてリュックに石を積め込む。粉雨としに水々の間をぬって歩く事凡そ一時間にして御岳神社に着き我等待望の弁当にする。日も高くなりかんかんと照りつける山道を急ぎ大岳小屋に着く。周囲に見える御前三頭の霧にかゝった姿、おくれ咲きの山桜を通して見える秀麗富士の白い姿何れも素晴しい眺めで我々の軽い疲れも一気にすっとんでしまう程だった。

大岳山—五日市　1A　戸田　清

馬頭刈山が近ずいてくる。休みく黙々と歩くうちにひどくのどがかわいて来、とぼしい水筒の水を分けあう。日この辺り少し行くと水がある凸というリーダーのことばをたよりに歩く。待望の小川に辿りつき、皆水の中へ頭をつゝ込んむようにして水をのむ。飲み終るとつ間赤ツとしたような顔つき、かく〳〵するうちに既に山を下り林道に出、五日市に入り駅につく。

茅倉尾根（反省）　1F　林　武志

別にこれと云う事もなく協力一致し、予定通り進み楽しい良い山行だった。三年の云う通りに御岳駅前の河原で石をつめ三、四貫づつかついだ。初の荷物になれないためか幾分低調だったが、大岳からは快調そのものと云う感じ。強いて欠点を云えば林のリュックが故障を起したのと、つゞら岩附近で少し隙しただけ。最後にもう少しうとけあってもらいたかった。

第三十七回例会

水無川本谷

期日　六月十七日
パーティ　L加藤、笹田、平沢
コース　塩沢—大倉—(本谷)—塔岳—大倉

カラリト晴れた夏空に丹沢山塊がクッキリと浮かび出ている。林道を戸沢の出合へと急ぐ。源次郎沢を見送って八米の雨に遭遇する。Sは左岸をクライム巻口附近はボールトなく苦心する。Kは右岸にルートを取り簡単にパス、F2は前日の雨か水量多く沐浴としゃれながら右岸を、F1を越えて行くと二段構成のF4に出合う。SはF5左岸にとりついてバンドを利用して滝上に出る。Kは左岸のチムニーからスラブに出、けのみ苦心してトラバースする。Kは断念して左岸を、沢は次第に傾斜を増し、最大のF10に出合う。右岸のチムニーに取りついたが風化された岩はもろく、ぼろくとくずれてしまう。それを断念してまき道をとる。目の前に展開したガレ場を登り明るい表尾根に飛び出す。塔で一休の後夕日を背に一ぱいめびて馬酒尾根を辿け下りた。

期日　六月二十四日

パーティ　L山口、長崎、田中、岩瀬、河合、下出、関谷、斉藤
コースタイム　蓮沢（八〇〇）—大倉（八四〇）—源次郎沢出合（一〇〇〇—三〇）—
F_7（一二〇〇—三〇）—F_{10}（一二〇—四〇）—塔ヶ岳（二三五—三五）—大倉（五四〇）—
蓮沢（六三五）

大倉から尾根道を分かれて水無川に下る。強堤の前を渡渉して林道に出る。カラヒゴのゴルジュを見やり、戸沢の所から沢に下りる。すぐにF_1が行手をさえぎる。ボールトはしっかりしていて簡単に右岸をクライム、F_2はホールドの少い左岸より行水はしても確実な右岸の方をえらぶ。F_3は左岸下側の水際を行くとトラバースをさけ安全。F_4は左岸の斜の上部に走るバンドを利用して竜口へ出る。F_5、F_6を乗にパスした後F_7は左岸をへずる。まき道は同じく左岸についているがこの方が苦労する。一年にはサイルでツッヘルする。ほっとした気持になると急に腹のへったのが気になり昼食とする。大滝F_{10}はNのみチムニーを利用して登る。他は左岸のクラックを頼責性の強い岩だから注意しながら登る。F_{10}、F_{11}とも水量は多い。ガーを登ってすぐ塔だ。持参の紅葉にのどをうるおす。漱務の塔ヶ岳を後にして大倉尾根を下った。

〃　窓　か　ら　〃

Y・I

遠く見えるは何処の山
我が登りしあの山か
想出残るあの峯々に
雪が白く光ってる

夜方に見えるは何処の山
我が計画のあの山か
希望は走るあの峯々に
雪寒々と光ってる

第三十九回例会

奥秩父主脈縦走

〇

【期日】七月十四—十九日
【パーティ】（縦走班）CL田中実　SL佐藤信若　山平大勇　M山口雄弘、笹田英次、赤沢裕和、長崎正弘（以上三年）　加藤鈴夫、岩瀬安三、河合亮波、佐藤充弘（以上二年）　林武志、福田宏二郎（以上一年）
（抑沢班）L村田博之、SL中野英司（以上三年）　野口弘生、李行雄（以上二年）　下出重遠、関谷敏　戸田清、斉藤忠正（以上一年）
（協力登山）田中将利
【縦走班編成】
縦走班はパーティを三班に分け後発、新　テントは毎日交代に当った。
総指揮＝田中実、次事責任＝山口雄幸　元気責任＝笹田英次

A班　山口、佐藤（信）　加藤、林
B班　田中実、笹田、岩瀬、福田
C班　平沢、赤沢（長崎）　河合、佐藤（充）

【報告者】
一小淵沢まで……加藤
才一日　金山まで……岩瀬
才二日　大日小屋まで……福田
大苑小屋まで……山口
才三日　金峰往復……笹田
甲武信まで先発隊…報告者略
〃　後〃…平沢勇
才四日　将監まで……佐藤
才五日、発電まで……斉藤
甲州雲取小屋泊……加藤
才六日　氷川まで……赤沢
附随山行
笠林檜の沢……田中将利
甲武信—堀山……赤沢裕和
気象……中野英司

医　薬　　佐藤信二

参考資料

①団体装備（線走、柳沢班）　③体重変化表（概定）

②団体食料（〃　〃　〃）　④賞　罰

⑤反省（村田　甲中実）

■コースタイム■

第一日（雨）　信濃川上着（8.15）発（9.00）—信州峠（12.10）—黒森（13.25）—金山（15.45）—就寝（19.00）

第二日（雨）　起床（4.00）発（5.45）—富士見（6.30）—大日岩（7.40）—千代のふきあげ（11.50）—五丈岩（12.15）—朝日岳（13.00）—大弛小屋（一陣14.00（森平笹）二陣15.00（山）三陣15.15（名大）同2発（25.30）四陣16.30）着（福田平笹）））就寝（18.00）（註、未発班による就寝、後発なし）

第三日（雨後晴）（先発タイム出発（10.00）—北奥千丈（10.40）—国師（11.30）—甲武信岳（5.00）—小屋（5.20））

起床（6.00）—発（8.30）—朝日岳（9.45）—金峯山（10.30）着（10.35）発—朝日岳着（11.30）—朝日発（12.00）—大弛小屋着（12.30）—発（15.35）—奥千丈岳（16.20）—口薙岳（16.30）—西篭尾根出合（17.40）—篭葉松久保（19.30）—フジミ（20.00）—甲武信岳（22.20）

第四日（晴）先発隊タイム　起床（5.30）—先発（7.00）—笹平（7.45）—破風（8.30）—乗破風（8.53—9.00）—雁坂嶺（9.45）—雁坂峠（1.55）—笠取小屋（2.05）、以後々発と同じ。

起床（7.00）—発（8.30）最低鞍部（9.10）—西破風（10.00）—東破風（10.20）—雁坂嶺（11.00）—雁坂峠（11.15）—発（12.00）—雁峠（13.15）—笠取小屋（13.45）—将監峠（17.00）—将監小屋（17.10）—就寝（20.00）

第五日（晴）　起床（6.00）—発（10.00）—将監発（10.55）—大弛（12.00—12.20）—発岩（12.50—14.00）—雲取小屋跡（16.00）

第六日（晴）　起床（9.30）発（4.40）—雲取山頂（5.10—5.50）—埼玉（6.45—7.35）—ヒソ石（7.50）—巳の戸の大くぼ（9.10—30）—昼食（10.55—11.55）—三水戸山の肩（12.50—1.00）—氷川発（3.50）

小淵沢まで

学校に勢ぞろいした我々は団体装備を西荻から夕方で混雑している新宿迄の道を急ぐ。キラくと輝く数万とも知れない都会の電灯が一つ一つ消えて電灯の一つ二つさびしくなる山間を元車は我々の明日に対する希望をのせて走って行く。小雨の小淵沢駅からは八ヶ岳もみえないが、我々のフアイトは雨を晴らさん。（小淵沢駅）（加藤）

第一日　金山まで

山田中が皆に秋で難を訴えます。誰が長かったのか知れないが（恐らく皆）予定の時刻には発てず、トップを河合においたが、喧嘩ないせいか一寸遅かった。リーダーも気付いていたのだから一声注意があってもよかった。尽食後は一気に信州峠につく。展望なんて凡そ想像もつかない水立の間にある。音痴な山男がどなるメロディーのうちに黒森の部落につく。その後は余り変化のない路を金山へとひたすらに歩む。途中に於て金山近しの激励の言葉が皆のお互の信頼と又ねらった効果をもたらし結果に酒ったのは深く反省させられる。なお黒森からの後、我々を成すべき立場にある三年が後に固まってダラく来られたのはオーダーの組方などにも関連して反省したい。（岩堰）

第二日　大日小屋まで

朝早くから霧は濃かったが、霧の間に瑞牆山が見えていたりした。五時頃から小雨が降って来て愈々本降りとなりやッケは直に雨が滲透る。金山から少し行った登りは急であった為、雨で冷えていた体があたっまった。富士見平について休憩しているとき瑞牆の岩が美麗に浮立っていた。大日小屋では水をくみ、なつみかん等飯べ元気付ける（福田）

大弛小屋まで

大日岩小屋から大日岩迄にも雨は益々降ってくる。寒さで体温が奪われ疲れてくるので少し時間は早かったが、尾根に出た所で尽食にする。然しこの頃から風も加わってくるので非常に寒く飯もろくく入らないので非

常食糧の乾パンを配って支度の出来た者から出発する。この乾パンで、大分力はついたが佐藤（信治）が幾分遅れ気味なのでパーティは益々ばらばらになって来た。最後の山口、佐藤、赤鬼が五丈岩へ着くと先発した内の一二年が三年に取残されてふるえていた。あの吹きさらしに大分長い間待ったから耐らない！…数人が同時に笛をソラしてしまう。中でも福田が一番ひどく行動不能になった。火で暖めたが駄目。結局この寒さでは長引くだけ不利で遭難も考えられるので福田を背おい荷を夫々交換して二つだけ岩の下に残して出発する。元気な者でもこの時は自分一人を持ちこたえるのにやっとの始末だったが、頂上附近で会った東京の桜井氏の親切な援助は非常に力ずけた。しかし人一人を背負うとどうしても遅れ勝ちなので比較的元気な林をリーダーとして先発の三年を追はせ、赤鬼、山口、福田、桜井氏が残る。然し後の四人も寒さと疲れで益々テンポがおそくなるので朝日の頂上で山口が三人に分かれて笹田、平沢、森沢を呼びに又もや先発、鉄山附近で林のパーティを追越し、大池小屋で既に火を起していた三人に援助を頼み森沢笹田が直ぐにもどる。しばらくして全員無事に次々とたどりついた。小屋に着くと火のお陰か一同元気を回復し、次の日の計画を練り直す。こゝでも我々がこの間を無事に通過出来た桜井氏の親切を忘れてはならない。（山口）

第三日　金峰往復

朝早く大池小屋に残る皆さしり目に林と二人小屋を出た。未だに霧行はあやしかったが、晴れそうだという希望は充分にもてた。昨日登り降りした道がすっかりぬかるんでいて足が重かった。重いと云えば衣服も未だにぬれていて少々寒い位だったし、靴など相当に重いし体もだるかった。だが二人とも体の底にしまってあるファイトだけですっとばした。金峯の五丈岩の下迄二人共走るようだった。あと少しで金峯と云う ハイマツの所迄来てやっと気が落付いた。頂に出る岩をと小五丈岩が深い霧の中にポット見えた。もう少しだ。未だに濃い霧が流れている。風は冷たい。そして強い日がまたかげった。リュックをとり出してやっと落付いたリュックにあった寒暖計を見るとなんと十五度、里では真夏だと云うのに、さあお嬉りだ、リュックが二つともしっとりとして重い。又急ぐ、疲れもなにもなくたゞ急いだ。考える事は小屋で待つ友達。励まし合いながら二人だけで山中の道を急ぐと、ヤホーの声がかすかに聞えた。三人の友が小屋の前で日光浴をしている。リュックを下して我々も日光浴をするとしよう。ノビくと体を延ばそう。生きていることがたのしくなってきた。（笹田）

甲武信岳まで　後発隊

先発隊を送り出して寂しくなった大池小屋に金峰へ行った二人の帰りを待つ。出発は大分遅れる。気は急ぐけれど思う様に足が動いてくれず国師迄のアルバイトで早くもバテてしまうと云う情なさだった。

分岐にザックをおいて北奥千丈岳に連絡をこいで待く。さすがに雄大な展望で見ている中に気持が良くなり体の調子も直ってしまう。国師の三角点からいよいよ下りになる。雨の後なので余り快調には下れない。倒木を越すのが又一苦労だ。段々原生林の匂が濃厚になる。指導員が隊員を乗せないので皆懐疑主義者になり、たゞ黙々となく。小屋で余り遊びすぎたのがたって富士見えついた時はもう暗かった。頂の上が開けていて空が見えるのが何となく懐しい。千の頂上から甲武信に向って叫んだが、元より答のある筈もなく、雖空しく消え去るだけだった。甲武信のガレは嶮高する代りに短い。風が強かった。きらめく星に自分でも説明のつかない感を受けてしまい、叫びながら小屋元と下った。迎えの出て来てくれた時は本当に涙の出る程嬉しかった。（平沢）

第四日　甲武信—将監

翌日肌寒い時先発八名は山口さんを先頭に甲武信小屋を後にし、石南我る山道を調子よく行く。破不の急登に出る。登る一と約四十分頂上着。一行少しくたばる。頂上で一と休。その後割合平凡な山道がつゞき皆快調漸々に倒木あり。それを跨いだりくぐったりす。倒木は山の一つの危険者だ。雁坂峠で一と休。附近ガスに包まれ周囲の景色眺めは出来ず、笹の道を

行く、高地なのにうるさく蠅につきまわれる。碓氷の近く場所の良い所に腰を下し紅茶など沸し、おいしく中食を食う。この時雨が少し降っていて寒し。腹に食物をつめ出発、碓氷の下りは苔んなはしやぎなから下った。美しい所だ。写真を取る。行く事小時、笠取小屋につく。時二時。先発後発両隊は笠取小屋にて合流し、小休の後、休(一年)を先頭にして出発、将監までの道は平凡で約二里の道程、多いのは曲り角だ。山を色む林はあかぬけした原生林で、道には熊笹がおい茂っていた。展望はきかず、この道は禁味乾燥だった。先ずあさ出したのは三年生である。之は余り一、二年に対してよい影響は与えない。中頃より三年生の足どりがにぶり協力性がなくなった。あと一息だが皆んな疲れた。(佐藤充弘)

後発隊　塩山—将監

眠られなかった車中を悔いつゝ塩山駅下車、よっぱらいやあんちゃん連の見受けられる待合室で軽い食事をし、水筒に水をつめて出発。この頃より ポツ〳〵降り出した雨は途中から本降りらしくなり皆雨具をまとう。番屋も過ぎ皆暗やみの中をもくくとして進む。やがて雲峰寺につき小休の後出発。花崗岩の風化した土であると云う青梅街道は道巾も広く直さ加割と歩き易い。柳沢峠も近くなり段々と夜も白み始めて来た。気温の降下非常に甚だしく一寸した休憩にも眠り勝ちな心をひきしめつゝ進む。この頃雨もようやく上ったようだ。柳沢峠をすぎると今度は赤土のひどい道だ。夜もすっかり明けてしまっていたのでよかったが、こんな道を夜歩くとしたらたまったものではない。少し下って工事人の小屋で休憩をことわられ、仕方なく次の部落迄歩く。ようやく部落につきその中の一軒で朝食を食べさせてもらう。「将監までなら楽だからゆっくりして行け」と云う言葉に従っていろりばたで眠り込む者もいる。こゝで多くの時間を費した後出発、待合、犬の峠も難なく過ぎ、一之瀬の田辺義一氏の家で昼食をとる。こゝでもこうすぐだ」と云う言葉になり腰を落付けていると、微疋金中から分れて帰る田中・森沢さんがつき縦走隊の離行を告げる。あわてて出発将監に向けて道を急ぐ。やっとのことで小屋につき、ほっとする間もなく各々部署につき晩の用意をする。間もなく離行を伝えられた縦走隊が割合元気な顔を現し我々をおどろかせる。それからひとさわぎの後に夕食にもありつけ快適な眠りにつく。(佐藤)

第五日　将監—甲武岩

第四日のどちらかというと雨がちの天候に較べてカラリと晴れ上った天気、前日の雨の故かすべり易い。休みなく歩くうちに少し朝の間隔が高れる。隊伍を整えるのと、休憩とをかねて大ダルの小屋の上方で一休みする。やっと下方に見える大ダル小屋に水をくみに行く者もいる。前を歩いている者の交互に動く足をみつめているうちにだんくと飛龍が近ずいて来る。奈岩へたどりつく。壮麗な眺望を楽しみながら将監小屋で炊いた昼食をほうばる。「あっちが大菩薩だ」と「柳沢はあっちの方だ」と一しきり話はずむ。(戸田)

甲武岩—甲州雲取小屋跡

はげ岩を辞して飛龍をまく。前にのめって倒壊寸前の飛龍権現に一同礼拝をして通りすぎる。これからすぐに我道となる。一年の誰かが足を踏み外す。横道に注意しながら行くと車が貫丈程も残り道を隔っている。だんくとした坂を一気に駆け下る。あざみの葉が足にいたい。狼平だ。この辺になるとキレイに植林されている。柱ばかりの甲州雲取小屋跡につく。後の小高い平らな所に幕営、さて二組から水場だ。昔所小屋に行く道を十五分ばかり。ひどいボサだ!!ほのかな湯気が立つ、めしが出来た、火をかこむ山男の赤々と映えた顔は二の上もなく満足なものだった。月が出た。月の光が淡く我々の努力の跡を賞讃するかゆ如く秩父の山々を照らしている。微疋の最後の晩だ。これがあってこそ山に来るのじゃないか。「いいな」だれかがつぶやく、本当に良い、だれもが心の中にもつ言葉ではないだろうか。しばし恍惚として誰も動く者がなかった。只残念に思うのは後発隊と一しょに今夜を共に得なかった事だ。(加藤)

第六日　氷川まで

朝霧にびっしょりになれたテントをたたみ、真暗な中を山原めざして一頑張り、小屋泊の者と合流して御来光を待つ。リスが樹間から何事か起ったかと顔を出す。我々がすっぽりと南アルプスの山に入った時それと対称するかの如く雲海をつき破って太陽が顔を出す。ゴ大フナで朝食をとる。山は興奮の絶頂となり、女性的な雰囲気となる。蓮華山をまき大ツ石で昼食にする。なごやかな空気が流れる中を縦走最後の食事をすませ、各々の家に帰って食べる品物を心の中に描いつゝ氷川へ急いだ。（秦）

附隨山行

菅林署の沢

コースタイム、菅林署(7.20)—集材機(8.30)—三室沢出合(9.55)—源流(10.50—11.05)—縦走路(11.25)—甲武信岳(11.35—12.40)—甲武信小屋(12.50—14.00)—甲武信岳(14.10)—富士見(15.20)—甲武信岳(17.10)—小屋(17.25)

メンバー　田中（将）　長崎

沢は原生林と雨のために暗い。倒木又倒木。三室沢附近で倒木と雨の為ナタメを失い、三室沢に百米程入り行程、気がついて原生林中を本沢へとトラバースする。ナタメはとゞもすると切れ易くなるがどれも新しいものだ。やゝ平らな草地があり急にトレールが現われ、ナタメが数多く続く。古い記録のミズヒの小屋跡らしい。ナタ目を頼に右へかき登ると甲信国境の甲武信岳の下へ出た。陰線にはガスがかかっているが、甲武信で飯をくっているうちに晴れとなる。主脈縦走がまだ到着しないので小屋に火を作って富士見の西鞍部まで迎えに行く。

甲武信—塩山

コース　甲武信—笠取小屋—一ノ瀬—柳沢峠—塩山

参加者　「リーダー」田中将利　森沢、以上二名　天候晴

（甲武信小屋で予定していた様に縦走班に別れる。

昨年に比べて道も修理され原東、西破不山陵の北側を通る道も大変よくなり、新しい橋もかかっています。雁坂峠から雁峠に至る道は倒木の連続でありましたが、今年はきれいに取り去られ予定以上に早く笠取に着く事が出来ました。笠取小屋からは小屋の水場を通って一ノ瀬に行く近道が出来ています。大変明るい感じのする雑林の中を通っています。

（後記）去年に比べ秩父の山道に横たわる倒木が取り去られた事は大変嬉念に思いますが、誰でも秩父に入り秩父の味を味わうようになれると思うと大変うれしくも思います。（森沢）

気　象

今年の入梅は途中で中休となり、七月初に台風ケイトが来襲し、再び梅雨型の天気が続いた。大体梅雨があける時豪雨があり、その後好天が続く年が多いが、今年もその通りで、縦走班が金峰で出合った豪雨はこの梅雨あけの豪雨で将監以後天に入月初迄雨雲一つみない好天が続いたのである。即ち七月十一日頃、日本海低気圧よりのびる寒冷前線が通過し、東の方に温暖前線がのびていた。この二つ関西方面は晴だったが、関東平野はこの低気圧に吹き込む強い湿気を持つ南風の為、気温は上昇し、気は蒸くなかった。僕は関西の雨と温暖前線が気にかゝったが、縦走班はこの手ヤンスをのがすと日がなくなると云うジレンマにあった。そこで綜観的に天気図を解釈し、前半は雨に降られるかもしれないが後半は確実に大丈夫との予想を立てた。それに僕のこの予想に元気づけたのは東京が温暖上昇と晴天であった。果して縦走班は金峰で猛烈な風雨にたたかれてしまった。僕もこれだけ梅雨あけの豪雨がすごいとは思っていなかった。申しわけない次第である。しかし僕の予想通り将監以後は全くの快晴と夜は満月をあおぐ事が出来た。（中野英司）

医　薬（健康状態）

医薬は風邪薬の少いので苦んだ。腹薬は色々あったのでよかった。外傷はたいした事がなく皆楽しく過せたのでよかった。健康状態は初めの内は山に慣れないせいか皆余り調子がよくなく、金峰山あたり大地小屋あたり

では雨に降られ風邪をひきそうだったので、あったのを大強小屋で皆にくばったが怒が出たものもなくよかった。然し二三人の人は腹を悪くした者があったが大した事はなくよい。

困った事はまめに対する薬が少なかったので、まめの出来た人は困ったらしかった。ご水かりの山行には腹薬、風邪薬、まめの薬、その他色々の薬を持って行った方がよいと感じた。注射薬も別位持って行った方がよいと思う。甲武信小屋かりは皆健康状態はよかった。

参考資料　団体装備

凝定班　テント三、グランドシート三、コッソエル三、ランタン三、山刀三、手鋸二　キャンバスバケツ二　バーナー三　ガソリン一升　ローソク五箱　大ナベ二　ヤカン一　ンヤベル二　携帯燃料三〇、ンヤモチ二　オタマ二　包丁二　タワシ三、ゾウリ六、薬品一式、針道具一式

柳沢班　大ナベ一、コッソエル一組　ナタ一

参考資料　個人装備

凝定班　毛布　ヤッケ　飯盒　寒中木綿　着換　水筒　懐中電灯　手袋　地図　砥石　食器　コップ　フォーク、スプーン、パン　手帖　マッチ　新聞紙　パン券三食分　其他

柳沢班　雨具、着換　其他

参考資料　団体食糧

凝定班　（主食）米三斗　ウドン少量　（非常食）乾パン一貫二百匁

（味ソ汁）味ソ八百匁　ダシ二百匁　キャベツ二個　ワカメ七ワ

（ライスカレー）カレー粉五個　肉（缶詰）四個　ジャガイモ二貫目

人参三百匁　タマネギ五百匁　ウドンコ四百匁　（調味料）塩五十匁　砂糖八百匁　ショーユ三合　ソース一合　（おかず類）カンヅメ十五個　海苔六帖　梅干六百匁　卵三十六個　佃煮六百匁　（飲物）茶百匁　紅茶一カン　ミルク三カン　（副食）スルメ拾二枚　夏みかん拾二個　キャラメル二十箱個　（個人食料）弁当三食分　乗ラアメ類

柳沢班　主食三日分　非常食乾パン四匁　副食　缶詰その他若干

参考資料　体重変化表（凝定）

学年		凝定後 7月20日	考査直後 7月12日	考査5日前 7月5日
3	実中田	貫 18.500	貫 18.600	貫 19.000
3	信藤佐	16.600	16.600	16.800
3	田笹	不明	16.000	16.000
3	口山	〃	15.700	15.900
3	勇沢平	15.400	15.200	15.400
3	崎長	14.400	15.000	15.400
3	沢森	不明	不明	不明
1	林	〃	15.000	15.200
2	充鑢佐	〃	13.600	14.000
2	藤加	〃	13.800	13.900
2	孫若	〃	13.600	13.600
1	田福	13.200	12.500	13.200
2	合河	不明	13.000	13.000

参考資料　費用

団体食糧個人出費四五〇円　新酒一信濃川上一四〇円　氷川一西秩父八〇円　將蓙小屋八〇円　その他五〇円　合計八〇〇円

反省

「凝定班」

（第一日）各自の荷重負担が相当に増大したのと精神的な「バテ」の傾向が見られた。「第一日目のオーダー失敗が二日目に影響した」と云う事は考えられない。然しこの日のみを考えた場合、学年別のオーダーは大なる支障、失敗だった。小休憩出発の際の立ち方が違い為に出来た間隔は目的地に着く頃は「〇〇さんはバテているのちやないかしとまで云われた。大きな山行特に長期山行のときなど気をつけたい。

（廿二日）全員余りにも時間の観念がなさすぎる。「暗いうちからがさくするんぢや仕事にならない」と云う事は前日の整備如何では絶対に肯定できない。いくら生理現象とはいい、リュックを背負ってから「キデ打ち」を訴える者がいる。だらしのない話だ。余り歩き方が遅いので、先頭に出たというのは絶対に許されない。オーダー変更の命が下る迄その位置に於て大声ではけます様な態度をとってほしい。今日の事故の原因は今から始まる。即ち炊食後の出発である。「寒くて立っていられないから次々に出発させてくれ」といい、乾パンを服給してもらって歩いていった。リーダーとして二の地へ（大日岩附近）は雨天に於ける最適の炊食地として選びながらも炊んどの者が全身びしょ濡れになって冷え切っており、手足の感覚が鈍くまって来ておるのでしかたがないと思っていた。然しその命令が不安にとざされた時は手のつけ様がない状態となっていた。三つに分れたパーティを統一すべきラストの中から伝令を出したが時既に遅かった為就なりリーダーの指図、駆務を忘れていたサブリーダーの怠慢が結局アクシデントを起す結果となっている事を強く感じる。中間の一二年は別にどうなろうとも考えなく刻々に冷えてゆく強風下にラストを待った事は「しかたがない」と云えば彼等に責せるべき何物もないがもう少し気を效かして処置を取るべきであったろう。吾二年の中にはそれだけの事が出来る者がいた事を信ずる。又トップを歩いたH・S・Mの三人はこのコースを既に歩いている事でもあるし、彼等の過去の経験からして当然の最適の処置を下せ得なかった事が大きな原因の一つとなったことも見逃せない。今日一日の行動が自分に向うた任務及び責任を及ぼしつゝ今後の山行に生かすべく経験として今日を間願している。パーティに責めを何物もない。たゞ断乎たるパーティの協力を翼して所せて頂き拙井氏の益人愛に敬服して止まない。

（廿三日）そろそろ割当てられた仕事を逃れようとする傾向の者が出て来た、それらの人々を観ると二三人のパーティ又は後の責任の山行では立派に技術を発揮している者である。自覚と自発を今後に期して止まない。先づ先発隊を考えるならば昨日の雨でリュックの重さは相当増加している上に昨日のアクシデントが精神的に消えなっていない。しかも出発の時刻が身体にだるさを覚える頃になっていた、そしてなおリーダーとまった四が腹痛に悩んでいた事がパーテーに少からざる影響いでいたに違いない。一方後発隊は先発隊よりも二時間余り遅く朝食にその矣は悪きれているが、精神的疲労は別にして金峰を任務した様なSBは相当のフアイトを失っている状態だった。しかも後発隊の出発前の行動は目的地迄数十分で行ける様な全く窮困とした態度であった。

又非常食種を一人も者に持たせてあった事は余りにも常識の外れた考えであった。実際活動は例え自分がどんなに疲労に落入っていようとも どんなに空腹を感じようとも完ぺきうれている仕事を違んでやりたすフアイトを常に持っていてもらいたい。

（廿四日）山に於てのつまらない小競合う事、これは余地ある間にも限界ある事を知るべきであろう。又人がバテかゝっている時は必ず他の者もバテかゝっている。人が空腹を知った時は他の者も空腹を訴えんとしている。即ち全てが忍耐そして我慢なのである。今後凡ゆる山行において忍耐こそ又くへからざるものである事を心得ていてもらいたい。将監小屋にて抑沢班と一緒になったわけであったが、彼等一二年の態度には少々冷いものを感じた。食事を作っている間もボンやりしていた様だったが、積極的に手伝い又上級生は何も知らない下級生に凡ゆる技術を後ろに与え、手伝わせるべきである。もうすこしの強合さがほしい。

（廿五日）「今日中に家へ帰らなければいけない」「要取山で開敬しよう」等感言をいい出す者がいる。こう云う事を云い出す者は時々出て来る。及者すべき所である。二日で歩ける所を五日で歩く予定が立てゝあればあくまでそれを実行すべきである、そして三日で帰れる所を四日かゝってもそれは一概に怠慢とは云えない。今日は出発時間を相当遅らしたにもかゝわらずそれを実行し得ない。一分も遅れないで出発すると云う確実な時間観念を絶対に持ってだけでいゝ。将ってもらいたい。完全に緊張

を失ったので同窓かついに。
マブをこいで探し求めた水源を此によって今後甲州雲取小屋跡をキャンプサイトとするより確実性なものをつかみ協力一致見事な仕事ぶりを発揮してくれた。一同に対して深く感謝いたします。

（十六日）　縦走班の出発態勢は実に美事だった。個人装備中特に注意したにも拘らず懐中電灯とマッチと水筒を忘れていた者がいる。凡ゆる方面に自分はやらなければならないと云う信念を持ってもらいたい。小屋泊りの者が合流時間に集合できないのはどうしたことか。里が近くなるとパーティがくずれる様だ。縦走は未だ行われていると云うことを考えてほしい。形式的にものを成立させても仕方がないが六日前信濃川上駅で訓示をしてオーダーを作りオモチャの兵隊の様に牧歌的に高原を歩いた時の縦走班が遠足の様な結末に終った事は残念である。しかし立川駅頭二十一名の部員の山で焼けた顔をみた時、遠足の尾根が一人一人に関連してくる様でしょうがなかった。「御苦労様でした」という言葉にれゆる意味が含まれていたことを改めていう。（田中実）

【柳沢班】

雨寺は勿論、雹霰をも吹っ飛ばす体力には感服した。しかし余り意地になって頑張らぬ様に今后大注意して欲しい。お互に打ち解け合う雰囲気を作らなかったのはこちらの責任だが、もう少し活発に協力ある行動をとってもらいたかった。主脳縦走班に対する協力が一般に足かったと思う（村田）

大弛小屋にアナタハン出現

前日の風雨で大活躍のY君、上衣もズボンもビショリそこで出現したのが毛布巻きのアナタハンスタイル、パタンで深で穴のあいたヂロル若手七ナタを持って初様に立った図は全くアナタハン見そのもの

（秋久主脳にて）

校内年中行事

富士登山

富士登山記

三好富士雄

七月下旬、生徒と一緒に富士登山をすることになった。小生にとっては昭和十八年の夏以来二回目と云うことになる。

今度の登山で一番強く感じた事、それは何富士はヤッパリ高いなー山と云う事だった。芝田口から登ったのだが、一合目、二合目三合目あたり迄はどうやら何事もなく両側木々の林の間を汗を流して歩き続ける丈で大した変化も見られず、苦しいだけ。降りてくる人々と登る人々の行き交ひで相当賑かである。五合目だったと思うがこゝまでくると眼前がパッと開けて視界が急になくなる。気温もグッと低くなる。側の傍には「天地の境」と出ていた。草も木もこゝから先は一本も見られない。七合目で一泊する。最初に着いた者と最后に着いた者の差は二時間位だったろうか。夕飯を食べたのだが、ボロくしていて不味い、「おし登を炊くのだそうだが気圧の関係で何時もあんな風にしか出来ないらしい。水はすべて雪解け水」然もそれが水筒一杯三十円ときいていさっぱり驚いた。翌朝三時半出発。冷えびえとした空気が肌に沁む。斜面もだん〳〵急傾斜をなしてくる。八合目についた時、前夜殆んど睡眠と食事を取らない為か、二年生の女子二名、MさんとNさんのびてしまった。「もう頂上に行かなくてもいい」と云う。「こゝで待っています」と云い出した。こゝでつぶられては大変だと思い、「こゝまで来て頂上に行かないと云う法はない。頑張れ〳〵」と元気をつける。所謂「胸突き八丁」と云われる難所である。文字通り一歩〳〵の前進で十歩行っては一分休の點行、太陽が真赤な火の玉となって昇り始めたのが五時廿五分だった。皆んな、暫し登るのも忘れて忙然御来光を迎いたのである。頂上に着いた時は嬉しい。とうゝ登り切ったと云う感激が何一杯こみ上げてくる。帰途は「砂走り」を一気に

滑り降りた。女生徒も帰路は全く元気を回復し、見違える程だった。頑張りも出来たし、師も強くなり、連愛も出て、面白そうではあったが苦しいとも辛いとも云わなかった。七合目辺りに雪渓があった。七月下旬の雪にしては割合にきれいなものだった。未面の雪を手で払い除いて下の雪を食べる。甘るまい甘、又食べる。続けざまに三四回口に入れる。登山杖をストックの代用に重心を後ろに靴の踵から滑る。面白い様に滑る。歩度がついてくる。所謂グリセードと云うやつだ。砂ぼこりと火山灰の道を降るよりは遥かに快適である。夏の真盛りに雪滑りが出来るなど全く感激の一ページだった。

かくして全員無事帰える事が出来た。

富士登山も年々盛んになりつゝあることは結好なことだが余り人が多すぎ、その為、山そのものが銀座や新宿の雑踏と同じ様な悪しき感をさせるのは何故だろう。山に対する考え方の誤っている者が増えて来つゝあるのではないだろうか。板沢先生と一人お話をした。「富士山の頂上も随分賑かで、東京と変りないね」「そうだね、何でもあるぢゃないか、ラムネ、ワンタンのはパチンコ屋位のものだね」と大笑をした。富士山は登る山ではない、見る山だとよく云われるが、あれは登った人が云うべき言葉であって「日光」の湯命と同じであろう。二回登ると又登りたくなる山かも知れない、十回も登ったと云う人のあるところをみると……。

富士通い

板沢紀男

二日程珍しいよく晴れた秋空に富士が雄大な姿を浮かべていた。お山も秋風が吹き訪れる人もなくなっただろう。昨年今年と連続で生徒諸君と富士行をし奇しくも雨の日晴の日両者の経験をした。

幼い頃箱根の山しか知らなかった私にとって富士山は山の王者の如く見え憧れてもみたが、とても登ろうなどという不心得な気持は持たなかった。それが中学校頃から時には山に登り友人達から富士の平凡なこと、銀座通りの如きものと聞かされ嘉屋山の兄貴分位に考え今又三度してなかくの山と恐れ入ったのが実情です。

今年は女生徒の参加もあり晴天に恵れ大体成功したと思う。年中行事として恰好の場所故今後益々盛大にして欲しい。「二度行く馬鹿」と云うから私も早い所三度目の富士登山をした方がよいかも知れない。

富士山に登って

一年中前

晴れた日の聳え立つ富士山を眺める時楽しかった思い出は再び蘇る。かの三万数千尺に余る巨体征服の度びに勇ぎ溢る、力のみに頼りに登った。やがて御来光を眺める。その光景こそ此世の物とは思えぬ程の神秘が潜んでいる様な気がした。我に返り真夏でも寒さを感ずる。頂上を見渡すと万年雪のまぶしいばかりの反射を浴びる、そして軽快な師をより下りた、振返り仰ぎみる雄大な全景は私に〝大志を抱け〟と教えてくれる。もう渇迫した。一路帰途についた。

二枚は上衣なら如札束？をぬらした下君、よろぬく顔を出した太陽に二枚を乾かさんものとあたりに目をくばりながら監視中、一陣の突風に札束がとびちり大あわて

秋父主脈にて

第四十回例会

八ヶ岳主脈縦走

【メンバー】 L岩垣、河合、下出、関谷

【タイム】

（第一日）（くもり、雨） 新宿（23.55）—小淵沢（5.42）—奉返（7.25）—遠磨石（8.30）—見晴台（8.48）—押手川（9.47—55）—編笠山（11.25）—青年小屋（12.20—25）—烽の火（12.50）—ギ宝珠巻径（1.05）—権現、ギ宝珠の鞍部（2.04）—権現三又峰（2.15—52）—旭（3.55）—大キレット小屋（4.30）

（第二日）（くもり晴） 小屋（6.43）—中岳（8.10—15）—赤岳（9.00—9.30）—硫黄小屋（10.50—55）—硫黄岳（11.12—11.50）—夏沢峠（12.00）—本沢鉱泉（12.40）—稲子小屋（2.17—2.50）—松泉湖（3.40—4.00）—松泉湖泉（6.43—6.32）—小淵沢（8.30—11.07）—新宿（4.05）

大キレット越　下出

小淵沢駅、水筒に水をつめ駅前の路を右折する。踏切を越え赤松の林を抜けると道は草原の緩かな斜面、忠実に砕石で此に上る。尾根筋不明の高原より尾根に取着き、苦むしに堆石の原生林中を飽目に助けられ手押川（青年小屋と笠頂上分岐）に出る。これより頂上へ樅松の切開をのぼりつめると偏平なコケモモの編笠山頂へ出る。太陽出て視界開く、尽食取り堆積した岩をギボシ鞍部へ降る。青年小屋あり、これよりギボシの登り樅松帯との限界辺ギボシ直下道二分、我々は捲くべく右壁松中に道を見出す。危険なガレ横断の連続やがて権現三又峰直下へ出る。権現三又峰期待した展望も霧のため空し。僅に霧の間きとる地獄谷が凄味をみせる。急なヤセ尾根を下る。時々雨がパラくと頬を打つ。旭岳頂上で雨は風を伴って見る見る視界をさえぎる。丁度其時切戸小屋の青い煙が立ち昇る。我々は滑る急坂を地獄谷よりの横吹にたっかれながらそれでも元気に四時半切戸小屋へ走りこんだ。

松原湖駅まで　関谷

外がだんく明るくなる。谷間を通し雲海上の異秩父富士を眺めるのもなかくよいものだ。小屋の出発は候遅かトリプだ。樅松、破片巻のコンビは三千米近しの峰を手へ一方眺望の佳さは我々の眼を楽しませ、南アの如きは手に取る様に見える。しかしこれに気を取られ赤岳を忘れ中岳へ来てしまった。皆実に好調だ。赤岳頂上を目指して岩をやたらに登る。赤拔からの眺望は偉大なもので、アルプスの連山、富士、秩父、諏訪地、うねうねと曲りくねる千曲川　今なお霧の中より消えぬ（赤岳頂上には小屋が出来三日から開いているはずだ）赤岳を一気にかけ下りた我々は若干下出、河合、関谷のオ！ダーで頻調にいくつかのピークを越え、充分に高山気分を味わ、たが残念でならなかったのは横岳の三角点を見出せなかったのと、ガスのため眺望がきかない事だ。硫黄小屋の小屋番の話では硫黄岳で遭難する者が多いから道に気をつけろと注意された。硫黄岳で尽食にする。ガスのために遠方の山々はかき消され只小屋すら見る事が出来ない高山ともおぼ別れだ「八ヶ岳よサヨウナラ」あとはたゞ長くゆるく下る道をくたびれた足をひきずりく歩くのみである。

総反　記　岩垣

先づ失敗の筆頭は赤岳から硫黄小屋までの退行であろう。この事は自分としても残念に思い又同行の諸君の深い反感を買ったかも知れない。冷静に振返ってみると又振返ってみて貰いたい理由もあった事を挙げておく。最大の原因は大切戸小屋の親父の言「今日は尽から夕立が有るかも知れないし」と云う事、先日の雨の苦い想出が消えないで脳裏にあった事は一戸である。次に中岳往復で余計な時を費した事更に予定の宿泊地の石室が天候の加減で大切戸小屋となったが更に出来れば天狗岳迄行こうと思った事以上である。最初の事が直接原因で、あとは附加的な過剰的な理由と云える。次に中岳往復と赤岳西岩壁の登頂、中岳往復の件は余りに小屋の主人と親内書のタイムを信用した事、次に地図の見方と地図を通度に見る事を欠いた事による　赤岳西岩壁登頂は一行無事の内に終えたが勿論引返し得る見

込あって登ったのであるが、見上げた距離及方全性と実際に取着いてからのそれでは個人の差がある事を心に明記し又今後の参考としたい。

第四十一回例会

塔ケ岳集中登山

【期日】 九月廿三、廿四日

【メンバー】 総指揮 加藤鈴夫

（勘七沢） L岩瀬、笹田、関谷、下出

（源次郎） L加藤、平沢勇、田中（マ）、鈴木、河村

（水無川） L福田、田中（ミ）、亀田、鈴木

【タイム】 都合により省略

勘七沢　関谷

ワラジも足に食い、皆調子よく進む。F1だ大水を一気に飛おりた水はあわをふきながらわめいている。四米のF2八米のF3連続的に変を表わす。いづれも右側の良きホールドを木の直登し得た。しかし荷の多い沢遡りの苦しさがつくづく感じられる。水の音は話を交わす事を許さない。F4は二段滝へて水量も多く雄大である。次に教導を至しつぶすが如くオーバーハング気味にのしかかってくるのが最悪の場だ。巻こうだがこの時現われた。へびーはトリプの岩壁さんを二三歩飛びのかせた。昼食をとると又進む、栃下状の美麗い小滝の連続した所を抜けると間もなくガレ場にナマまるホルこともなく頂足路にたどりつけた。皆実に好調であった。

勘七沢感想　岩瀬

F4は一寸も困難な点はないが、とうくたる水量と四体にかかる水飛沫はあっても、実体は容易な事には寝りない事を忘れ勝ちな時がたまくある。リーダーは先輩その他諸にも遠慮してはならない事を暗黙の当然の事でありながら忘れ勝ちである事を忘れこの山の鉄則を今後のために特に記そう。

水無川　亀田

尺帯着を待った為に遅れた四十分を取り戻すため村道を急いだ。戸沢より河身を進むと間もなく源次郎沢の出合に到着、朝食を済し、草鞋にはき代え、源次郎沢行きと別れて我々は福田亀田田中（マ）鈴木の順で本谷へ入った。F1、F2共に左手をゆく、F3をこえるとすぐF4に出合ったが右側を登る所を左側を登った為福田は手こずって一人で登ったが他の三人は滝の上で休んでいたパーティに助けてもらってやっと登った。食後し沢の出合につき、ここで昼食をとり約二十分程休む。出発後間もなくF9をこすと大滝に遭遇する。高さ約二十米たが水量が非常に少い。左手とまくと垂直上に出られる。

水無川本谷　福田

水無本谷の種々な滝を登って何の事故もなく行ってこられたが横断が二人もいたのだから色々な沢に対する知識を充分に身につけさせて貰いたかったと、滝が沢山あったが時間の関係のため直登可能のものもまいたのがあったのは残念であった。そしてF4はもう少しルートを研究して行ったら時間をつぶさないでスムースに行ったのではないだろうか。

源次郎沢　加藤

第一の棚、第二の棚は簡単にパス、F3が行き手をさえぎる。上には右岸をまき、私とは二段目にパス、下は水際を苦労しながらパス沢は次第に傾斜を増す。右岸に大きな崩壊をみて右折すると本沢最大のF9に出合う。水際の直登は困難、左岸から大石のすきをトラバースして滝巻へ出た。大きく沢は二分して右側を行くとF10にはいる。左岸と苦労して登り他はまく、しばらく行くと水がなくなり50米程のルンゼに出合う。4ムニーに身を入れ直登、テラスに出て左岸をまく、私とはハングをまわりこんで登る。まくにガレをのぼり大倉尾根にとび出した。

源次郎沢反省　加藤

休憩を急いだ為か少々つかれ気味の上にも出合で一休した為にかなり疲

適に歩けた課であり、天は二三の棚を除いてはさほどではなく、若僕の若場は非常に面白いために35分も遅刻した事は大いに問題となるべき所である。始めて参加した級豚、同対の頑張りを賞賛してよい。三年のよき指導のために立派な遠行が出来たと信じている。

水無本谷　遅刻記録　　林　武志

目を覚しておどろいた。七時半、朝飯も食わずにとび出した。お陰で大倉附近ではフラフラ。先ず朝食を食わないのが失敗、大倉乙樓食四杯を食ったが間に合わない。フラフラと初めから河原を行く、原次郎出合は少しきえたが長事刀についた。体の調子悪く手足がふるえる怒ったより順調に滝を越える。所ではルートを間違えて行の失敗、右岸から左岸のルートをみつけ再び左岸のルートをとりF_4を越え大棚下へ　ファイトなく左の沢から高巻く。最後の棚附近から調子もよくなり難なく山頂へ、この山行の最大収穫は遅刻　朝食をぬいた事　良い美、単独行の至誠その地

塔ヶ丘山—蛭ヶ丘　　川村　宏

パーティ　岩堀、田中(義)　笹田、川村

コース　塔ヶ丘—両森尾根—大倉—蛭沢

報告・途中日も暮れかゝり霧を通してみえるカラヒゴの炭焼小屋よりゆるやかに立登る煙がなんとなく印象的であった、カラヒゴ沢の大滝も白く光っていて思わず感嘆の声があがる。それから一路蛭沢へと四方山話等しながら足をも休めずに歩き通す。

塔ヶ丘山—蛭ヶ丘　　飯塚

五時四十五分頃ご御来光をみずに我々は急き足で塔を出た、坂を下る時など骨から下げた水筒がびしゃん〳〵と音を立て、その音を聞くたびに水がのみたくなる。途中後を振り向いては塔ヶ丘をみるが、実に高い所に見えるのでおどろいた。大時二十三分丹沢山着、飯にする。私は腹が一杯だったせいか自然と足が早く動くようになった。空は晴れたり曇たり始終変っている。振返ると懐しい塔の水場から煙の立っているのが見えた。こゝから見ると頂上より随分下った所である。

又段々曇ってきて急に寒くなってきた。愈〻目前の蛭ヶ丘に登り始める。汗ばんだ熱い体が小雨で冷れる。愈〻苦労して蛭に登りついたが雲で視界が見えない。時計は丁度八時十五分を指している。いつも学校に行く時間だ。

丹沢主脈縦走　蛭ヶ丘山より西野々　　下　出

蛭で出合ったものは早い者の流れと見であった。早々にして詳し此より地蔵平まで長い坂道を登いら出た。そこで我々は陽の光を仰ぐことができた。すゝきの間にドームを見せる蛭へカメラのピントを合わす。姫沢の景色も印象的、柔毅を捲き此より秋の風物アザミ等眺めしつゝ初秋の雰囲気を山歩きを続ける。焼山にて秩父周辺の山々を前に腹をこやし西野々のパスへ直降下。

反　　省　　加藤　鈴夫

沢の縦走等ともいうべきこの例会に於て、なぜ集中形式をとらねばならなかったかと或る人から疑問が出た様であった。「集中」という形式は最も良い登山方法であるが場合によっては最も多くの欠点を持った登山方法の一つだし、前者は孤独を考える場合であり後者は力の分散による技術の色下である。しかしこの例会の如くリーダーの養成、技術の習得を目的とした山行きに於てこの様な登山方法は適さないしと云った。私もそれには同感であったが、二十三、四日と休日続きで沢は非常に混雑するだろうし大勢での行動は純くならざるを得ないと考えたのである。残念に思った事は予想以上に不参加の者が多かった事である、特別の事情で参加出来ない場合でも必ず集合所迄その理由を云いに来るべきである。この不参加者が多い為に遂にカラヒゴ沢をつぶした事に対して反対者が出た、一人の指導を受けるより数多くの者から指導を受ける方がより多くの技術を習得でき この例会の目的にそうものと考えたからである。それから第一に塩沢の沢がつぶれた事等は残念であった。又万一の場合を考えて若どの者が間違以外の日以外の研究をしていなかった事等は考えさせられる問題であり、今後の山行に於て参照とすべきである。もしも遭難で この山行を終た事は私にとっては嬉しかった。会員の協力等に三年間九度よりの山行が出来たと思う。

個人山行

谷川岳西黒沢

田中　実記

期日・八月十七日前夜発　晴後雨後晴　パーティ　鈴木(30)田中(30)

コースタイム・上野(7.50)—土合(5.05)—山の家(5.10—5.15)—(迷う事35分)—佐野校本発遭死体現場(7.20—7.25)—涸沢出合(7.45)—止むなく尾根へ(8.30)—氷上山(9.45)—氷河の跡(10.10)—ザンゲ岩(10.20—10.30)—肩の広場(10.50)—谷川オキの耳(10.55)—肩の小屋(11.00—12.35)—天狗岩(13.25)—熊穴沢頭(13.50—14.05)—尻出し岩(14.10)—天神峠(14.55—15.05、この間保土沢と尾根に取付かんとして45分間迷う)—天神小屋(15.50—16.00)—谷川温泉浅間神社(17.05)—水上(17.45—19.00)—上野(23.20)

装備・アイゼンその他

費用・上野—土合往復　二四〇円(改正前)

報告・白蛇滝主峰の滝に満足しているが、丁度佐野校死体発掘現場(最後の一つ)からアイゼンを使用する。なれぬのためであろう、雪は純白さを失い、雪渓は相当狭くなって危険性あり、尾根にのっる、けぬんされていた雨も小屋を出る頃には止み　一気に天神尾根をかけ降りた。

雲取山—将監峠

林　武志

期日、八月三日—七日　毎日夕立　パーティ　林外八名

コース、氷川—鴨沢—七ツ石小屋(泊)—雲取山—狼平—大ダル小屋(泊)—将監峠小屋(泊)—三ノ瀬—大切峠—落合—丹波(泊)—氷川

この山行は中学の二年の養成の目的で行われた。為時間もゆっくりとしています。大ダルから将監は唐松尾へ行く予定だったので乙時間が余った。四日目は泉水谷出合にキャンプする予定だったが豪雨のため丹波山中学校へとめてもらった。

上人菩薩嶺

期日、八月十三、十四日

パーティ、名倉外

コース、新宿(7.00)—塩山(11.30—2.00)—バス—湯村(2.30)—谷川峠(4.20)—小屋(泊)

○小屋(5.00)—石丸峠—大菩薩嶺—小屋(11.00—3.15)—朝食(4.30)

バスで湯村、そこから次第の道を登る。汗だくの体に次からの風が二つちよい。泊りは大菩薩峠でノミの巣中夜要にたまらくとなる。朝霧に隠れた石丸峠から大菩薩を眺り白川べりを下って鷄冠温泉へつまらない

コースの中で温泉能の静けさがなつかしかったのみ(名倉)

夕ルヨ沢

期日、八月二十日、　天候　雨後曇

パーティ、田中実、佐藤実、笹野実

コース、氷川—大野—タル沢出合(7.00)—ツサビ滝(12.00)—天狗ハヤ(12.30)—二つ滝(1.00)—支流出合(2.00)—六つ石(4.00)—氷川(6.00)

バスを逃した我々は大汗をかく。歩きから行くとうるさい石が多い赤さくりとする。笹荒小々下で昼食　天狗はまき時間の関係上支流を通行して六つ石に至る(佐藤)

大黒茂谷下降

期日、八月廿六—廿八日　パーティ　平沢勇　長崎正弘

コース(26日)　丹波発(10.33)—三条橋(昼食)11.55—12.36)—小室川谷(13.40)—十文字(15.45—17.00)—大菩薩峠(19.00)—藤緑荘(20.00泊)　(27日)出発(7.43)—大菩薩峠(11.25—11.35)—妙見岩(12.05—12.30)—大菩薩嶺(12.36)—大黒茂谷最低鞍部(昼食)(13.45—14.05)—伏流(15.00)—停止数営(15.36)　(28日)出発(6.50)—(釣り開始8.20)—泉水谷出合(10.00—10.45)—泉水小屋(昼食)(11.40—13.40)—丸川峠(15.45)—落合(18.15)—塩山(20.00)　(45分かつと要す)

大黒茂谷は任弁田部重治氏が遭難された処だと云うので非常な不安と期待とを持って下降したが其程悪い谷とは感じなかった。尤も雪はないし、流は大抵乾いての話であるが…。ナメ、滝、ゴルジュは全く期待以上に素

晴しかった。が、メイレットしよう計画も成功せい程なうかしそうす。ので地道からちっくり撤収するだけでタライムの魅力はない。やはりこの谷は下降路として価値があるのだろう。とにかく人の余り入らぬいこの辺の谷、一度は行ってみたい面白い所だろうと思う。（平沢）

小佛峠

パーティ・L関谷、田中（実）、平沢、林、下条、加藤

何故俺がリーダーにされたか不思議でたまらない。兎に角この山行は丹沢縦走のおまけだ、三時半に手洗を出発し鉄道はバラしつつ、等と言い子からも歩き方は決して遅くはなかった。しかし小佛くらいにのぼるもう暗くなっていた。高尾山を登り切り後は満月の光を頼りに賑かに話しながら下るだけだ。又暗い中を犬に吠えられながら歩くのも決して悪いものではなかった。（関谷）

表尾根から鍋割尾根

天候、晴　メンバー　若藤

コースタイム、菩提（7.00）—三本松（7.47）—二ノ塔（8.50）—塔（10.30—11.55）—鍋割山（12.17—45）—後沢乗越（1.20）—ドッセ沢出合（1.33）—朝七二峠（1.50）—蛭沢（3.00）

菩提の殿家を発つ、話に聞いた三本松までくる。二人の若切場を登ると二ノ塔へは移りへ出て行くよりも近いそうだ。第は身丈以上あり径は甚だ不明瞭で失い勝である。二ノ塔に出ると径は立派だ、天気が良いので通中辺ノ島、三浦半島を下に彼方には塔より今行く表尾根、隣に鳥尾根が夏の日光に陽の陽陰が判然たる明暗となっている、塔より鍋割山に行き何の知識もない我輩は鍋割尾根を下りたが又弄の連続、大いに長く感じた。幸にも後沢乗越なる小木左に枝わ出、晴い水量の多い沢をドッセの沢へと下り、四十八瀬二峠小ヤにつく。（若藤）

NAC会報 No.1

過去一ヶ年余、偉関なる山岳部OB会と言故するに不断の努力を続行して参りました結果、有志各位の御協賛を得たりもあり、ここに現役待望の「西高アルパイン・クラブ」が新発足致しました。OB間の親睦を一層深めると共に現役山岳部会員の為に多少なりとも援助出来得れば幸と、思ふ今日この頃であります。名の御参集を得ましたので、種々御指教の上左記の会則と共に本会が設立した次第であります。既に山岳部OBとして二十数名を数又且未年度に於て二十名に近い新OBを迎へんとする我々にとって、かくの如き山岳会の成立は非常に意義深いものと確信致します。

こゝで本会則について簡単に説明して見るならば、本会は西高山岳部に対する援助協力をその大なる目的とすると共に、独立せる山岳会として運営すべく、将来会員を山岳部OBのみに限定せず、西高卒業生有志を広く受入れることになって居ります。又一ヶ年の会費二百円も通信費値上げ等による現今の経済状態より見るならば止むを得ざるものがあり、会員諸氏の御諒解を得るところであります。

今後、本会の懇会及山行並現役の山行についてはその都度御通知致しますから事情の許す限り御参加下さいますようお願申上ます。

会　則

（田中将判君の印刷された会則を参照して下さい）

◎委員紹介

十月廿一日の懇会に於て、左記の三名が常任委員として選出され、その中より括弧内の如く代表者及会計が決定致しました。

（代　表）　安藤英弥

（会　計）　中川陸一

　　笹野幸夫

山麓情報

○倉沢橋から倉沢谷右岸に沿一間の林道を作っている。通行中上からのぞかれるので感じが悪い。現在八幡沢出合まで完成しているが、来年末には鐘乳洞迄せ八年末まで工事を続ける模様。

○一杯水造林小ヤ　サイド大部分、本年分皆伐

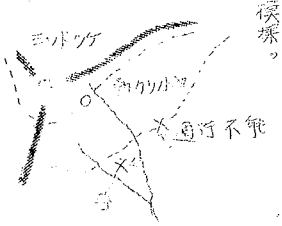
一部なし　ガラス張りの窓影はどこにもない。小ヤの中までがボサである。小ヤへの道路もススタケのブッシュをこがねばならない。

○一杯水後新小ヤ　本年春新築　一杯水際一五本面、林道が小ヤの中を通っている、ヒナン用のもので、ヤネのみが、火が焚ける実験用である。但、植林の中で新がすい

○大日小ヤ　新築　今夏完成

○十文字小ヤ　新築落成と既に報告されたが、実際的な完成は本年末になる(と依頼された)

○大洞山大ダル小ヤ　今夏取こわした。某紙に発表された收容人員二十人は誤しきものである。



マーク・バージ図案集如何ですか

この図案に於てNACの字あるも現役用に作成するも可ですから及第申込を待ってバッジは作成します。

等高線の中心に三角点

第1案

第2案

第3案

ハーケンクラスピナハンマー

第4案

第5案

第6案

第7案

第8案

筆者紹介

三好富士雄　本校体育教授、ガッシリした体躯、スキー技術は大いに買う処がある。

板沢武男　本校厚生教授、過称板チャンで親しまれている。

鄙祭修一　教頭の転任おうれ社会科を担当　大の山愛好家である。

田口一男　本校地理教授、学生時代校内陸上競技界で鑑十　現在も至る所生かしも校陸上部を指導面々その成果を挙げつつある。

以下は生徒紹介

新野洋子　服文産社長新野喜男氏令嬢　美術部のホープとして精進し期待されている。なお記念祭の絶大なる援助を氏にこの欄より感謝致します。

亀田佐　卓球部キャプテン、本年度関東大会にも出場のベテラン

新幹部紹介

九月の部会にて幹部の改選が行われ、部の運営は一二年の手に移った

(L)加藤鈴夫　(L)高橋安三、(SL)林武志

新部員紹介

二年　河合英敏　二年佐藤充弘　二年松崎洋平　一年飯塚東夫

退部　三年鈴木輝夫　三年河合秀明

終りに

○部員の原稿の集りが記念祭等の行事もあり、まして意外に遅く部報発行が月余予定より遅れた事は先生方の御多忙の中を遅くまで戦稿と広告の形式で御協力下さいました各位にお詫びし御協力に感謝致します。

○何事にも本質的な事柄がある、之を見出し守って行くのは大仕事であるが、是非実行せねばならぬ事だ。我々は部報に就てもこの美学えねばならなかった。山行についても、社会についても、

○四月以降の分までの投稿を予算内にまとめるのに一苦労した。而って大分の削除御了承下さい。

○話合おう腹蔵なく、正々と意見を述べよう。そこにお互の理解と融合があるのだ。話しかけよう仲人へ、其が山の友への親切の道だ。

○重複するが部報に対する、根本的に部に対する関心が薄い。それは単なる個人の問題ではない。それは何を意味するか考えてみよう。

○原稿の陽正に至誠を生かし援助された前編集員田中実君ありがとう。

○一年の斉藤祐下出岡谷の諸君の積極的努力によりスムースに進んだ。

○美術部新島さんの作品をのせ嬉しく思います。

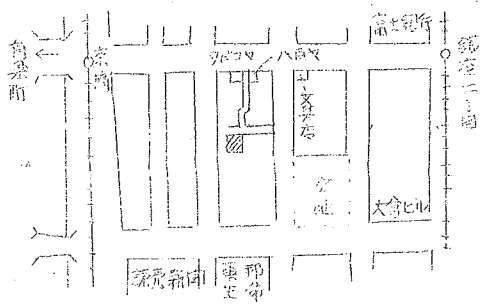
○山に対する意見、考え方は皆各々異うが絶対と云う事は自分を越えてはなり、それを統一しようとするのは個人の基本的人权にまで問題がふれる。又無理だ。統一を真剣に考え過ぎ又自己の見方に執着して本性を失った者がいる。残念な事だ。我々は部内に於て共通な美を以て協力しなければならない。

○"楽書帳"するものあるも、年に数回の個展では適切役に立たないし、無意味だから時々其中の意見より公表するに価するものを選び、それについて研究討論を行い以て前進の礎とする事を提案して結びとする。

行程第七号
事務所
東京都杉並区天竜前三ノ八八
都立西高等学校山岳部
編集者 岩瀬安三
発行者 加藤勲夫

好日山荘

大阪・北区・壹ビル南・協和銀行ビル三階
東京 中央区銀座西二丁目五
電・京橋(56)3600 振替東京113657番



スキー用品

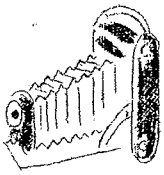
特に岳人の皆様への

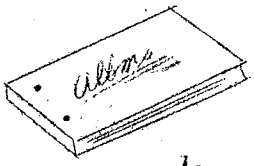
新宿駅前
TEL(37)3171

かずみ

カメラの店

現像・焼付・引伸





春光商会

西荻南口銀座通り